
ホトラヤマを ムラのくらしにつなげよう

山村に生きる会 里山分野
代表 今北 哲也

1. はじめに

琵琶湖に注ぐ安曇川の支流のひとつ、針畑川流域が今の活動舞台であり、滋賀県の西北端、京都と福井県に接する中山間地である。行政的には滋賀県高島郡朽木村に属する。

会員は地元に住む30～40歳代で構成されており、人形劇、草木染、木工等の活動分野がある。

里山分野としての活動の狙いは、シイタケの栢木・木炭など自家用程度の利用に留まっている里山を、山間奥地の将来図の中で積極的に活かしていき、新たな定住者家族にとっての仕事づくりに結び付けていけば、という点にある。

活動計画の主なものは以下の通りである。

1) 里山履歴マップづくり

- ①里山の相（林相）の変遷 ホトラヤマ～現代を調べる
- ②在所（ムラ）を取り囲むホトラヤマ等の分布や広がり調べる

2) 里山の現況データブックづくり

- ①里山（二次林）の材績、立木密度
- ②植生 山野草、薬草、野性キノコを調べる

3) 里山リサイクル案づくり

里山をフィールドにした、仕事づくりの青写真作成

今回の調査活動の担当者は以下の通りである。

石川善郎（京都市）、光田重幸（京都府田辺町）、今北哲也（滋賀県朽木村）

2. ホトラヤマとは

地元、針畑川流域だけに限らず、湖西地方に広く分布している言葉である。一般に肥草山のことを指しており、大概、春ごとの山への火入れ慣行によって維持されてきたクサカリ（草刈）ヤマの中で、特にホソ（ナラ）の幼木などが優先するヤマをホトラヤマと呼び、カリヤスなど優占するオシガイヤマ等と区別している。

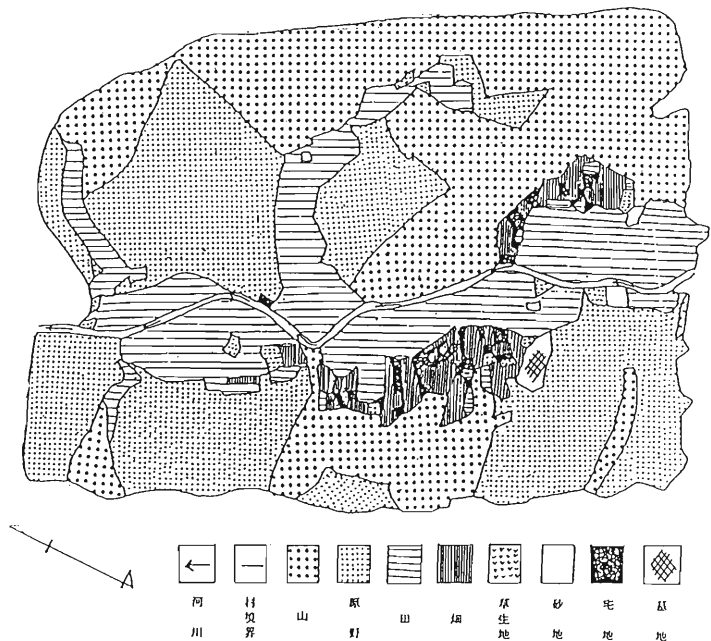
夏の土用頃からホトラヤマに入る。予め春に惣普請（ソウブシ）でカヤダイラ、ヨシダイラ等のダイラ焼きやホトラヤマ、オシガイヤマ等のヤマ焼きが行われ、梅雨を過ごして伸びてきた柴草を土用前後から刈り集め（ホトラ刈り）、牛のエサや牛の足元の敷草として日々利用してきた。これらはいずれ厩肥として田んぼに施される。牛を飼っていないふるい時代の頃には、これら山の柴草は刈敷として直接田んぼ、あるいは畑に投入されてきた。山の笹を田に敷き詰めたり、泥田の中へ若いイタドリ等の青草を押し入れたりするのは、刈敷慣行の名残だと考えられる。

いずれにしても、山間地にあつて古くから田が拓かれていた地域では、田を養う山ーホトラヤマに代表されるような山々はいろんな役割を担ってきた里山の中で、特に大事な存在であり続けてきたといえる。

面積的にも、当時の家族数、農家戸数から推して、稲の反当収量も少ないが故に、かなりの在所はずれにも田が拓かれ、飯米の確保に懸命であった。（表－1 参照）後述の林相図の変遷に示されているように、当時（1960年代前半頃まで）耕されていた田んぼは現在はスギで黒く塗り潰されている。

当然のことながら、奥地の田んぼに対応して、それらを養わんがためのクサカリヤマも火入れ慣行によって維持されていたからホトラヤマ等の分布域も現時点から想像しにくいぐらい広がりのあるものであったと思われる。（図－1 参照）実際、当時を生きてきた80～90歳代の年輩者達からの聴き取りによれば田の広さ、枚数に対して不足気味なクサを確保するため相当

図-1 明治期の古屋村の土地利用図
滋賀県高島郡古屋村地籍図より作成（1984 杉村原図）



奥山までホトラ刈りに通ったという。例えば生杉部落（針畑川源流域にある在所で丹波と若狭に接する国境の在所）のヤマ焼きでは、丹波と若狭境の三国岳付近まで火入れをし、時々若狭側まで延焼することがあった、という。

表-1 明治11年の朽木村土地利用 滋賀県高島郡古屋村地籍図より作成（1984 杉村原図）

項目 集落名	人口	戸数	一戸当りの人数	土地の面積 (町)	一戸当りの土地面積 (町)	m	一戸当りの水田の面積 (町)	山地 (町)	一戸当りの山地 (町)	全面的に占める山地の割合	原地	移主品目	額	量	移出先
市場村	500	108	4.62	122.7	1.15	27.0	0.25	65.8	0.61	0.54		製茶	375円	1500斤	西京
荒川村	230	47	4.89	528.5	11.24	24.6	0.52	485.7	0.3	0.92		炭	60円	1000俵	南船木
野尻村	107	23	4.65	70.1	3.0	12.8	0.57	37.5	1.63	0.53					
岩瀬村	267	57	4.68	88.8	1.55	7.6	0.13	35.6	0.62	0.62	14.4	製茶	23円	93斤	西京
柏村	155	36	4.30	248.9	6.91	15.0	0.42	214.6	5.96	0.86		炭	600円	7500俵	勝野
宮前坊村	274	55	4.95	426.4	7.75	27.0	0.49	375.7	6.83	0.88		炭	600円	10000俵	勝野
麻生村	391	73	5.35	1281.4	22.1	24.6	0.75	1131.0	15.5	0.93		炭	2800円	26000俵	市場
地子原村	270	43	6.28	477.6	11.1	32.6	0.75	435.6	10.13	0.91		炭	1046円	17425俵	勝野
雲洞谷村	307	59	5.20	604.1	10.23	47.7	0.81	549.4	9.31	0.91		炭	1200円	15000俵	船木
能家村	201	36	5.58	492.3	13.7	30.6	0.85	347.5	9.65	0.71	102.7	炭	1080円	18000俵	岩瀬
古川村	209	38	5.50	499.0	13.1	14.5	0.38	468.3	12.3	0.94		炭	700円	10000俵	勝野
大野村	149	25	5.96	189.2	7.57	7.3	0.29	174.0	6.96	0.92		炭	484円	6060俵	勝野
村井村	244	44	5.55	594.2	13.52	15.4	0.35	563.1	12.8	0.95		炭	800円	10000俵	勝野
梶生村	289	54	5.38	551.4	10.21	21.7	0.40	509.5	9.44	0.92		炭	804円	15700俵	南船木
小川村	98	17	5.76	485.5	28.58	7.6	0.52	277.4	28.27	0.97		炭	115円	1440俵	梅木
桑原村	97	16	6.06	255.4	15.96	13.7	0.86	177.9	11.11	0.70	59.2				
古尾村	136	25	5.44	184.7	7.4	18.3	0.75	116.3	4.65	0.63	45.2				
中牧村	101	20	5.05	66.4	3.32	21.4	1.07	32.8	1.64	0.49	5.2				
生杉村	119	20	5.95	102.1	5.10	24.1	1.21	49.7	2.49	0.49	20.9				
小入谷村	64	12	5.33	63.9	5.3	13.6	1.13	24.5	2.04	0.38	23.0				

1978年「滋賀県物産誌」より朽木村に関する記載内容の一部をまとめたもの
 古屋村、中牧村、生杉村、小入谷村の4在所が会の活動領域、「原地」の項目が草刈山（ホトラヤマ）などに対応するものと考えられる。古屋村の場合「田」13.6町歩に対し「原地」23町歩

3. 里山の履歴マップづくり

針畑川の上流部－在所では古屋、中牧、生杉、小入谷－を対象に空中写真を使って山の相の変遷を概略読みとって図化した。以下はその報告である。

①林相の変化

1963年から1990年の林相の変化について調べた。林相はスギ林、スギ新植地、スギ広葉樹混淆林、広葉樹林、伐採地、林地外に分けた。そのうち広葉樹林については樹高、クローネの大きさ等から、天然生の広葉樹林（広葉樹林Ⅰ）、壮齢の広葉樹林（広葉樹林Ⅱ）、若齢の広葉樹林（広葉樹林Ⅲ）の3つに区分した。1963年撮影の空中写真（KK-63-14X）からの林相区分を図－2に、1990年撮影の空中写真（CB-90-3X）からの林相区分を図－3にそれぞれ示す。また、この林相図をもとに、点格子板により面積を求めたのが表－2である。これらのことから1963年から1990年の林相の変化について言えることは次のとおりである。

- ①スギ広葉樹混淆林はスギの造林地に広葉樹が侵入したものと考えられる。
- ②スギ造林地は3.8倍に拡大している。スギ広葉樹混淆林もスギ造林地と考えれば、4.5倍に拡大している。
- ③天然生の広葉樹林はほとんど消失した。
- ④田畑のところに、スギ造林地が出現している。

表-2 林相の面積変化

林相	1 9 6 3		1 9 9 0	
	h a	%	h a	%
スギ林	1 1 0	(5.8)	2 9 7	(15.7)
スギ新植地	1 8	(1.0)	1 8 8	(10.0)
スギ広葉樹混淆林	3 8	(2.0)	2 5 5	(13.5)
広葉樹林Ⅰ	3 3 7	(17.9)	1 3	(0.7)
広葉樹林Ⅱ	3 9 2	(20.8)	9 2 0	(48.8)
広葉樹林Ⅲ	5 1 7	(27.4)	8 1	(4.3)
伐採地	3 3 5	(17.8)	4 7	(2.5)
林地外	1 3 8	(7.3)	8 4	(4.5)

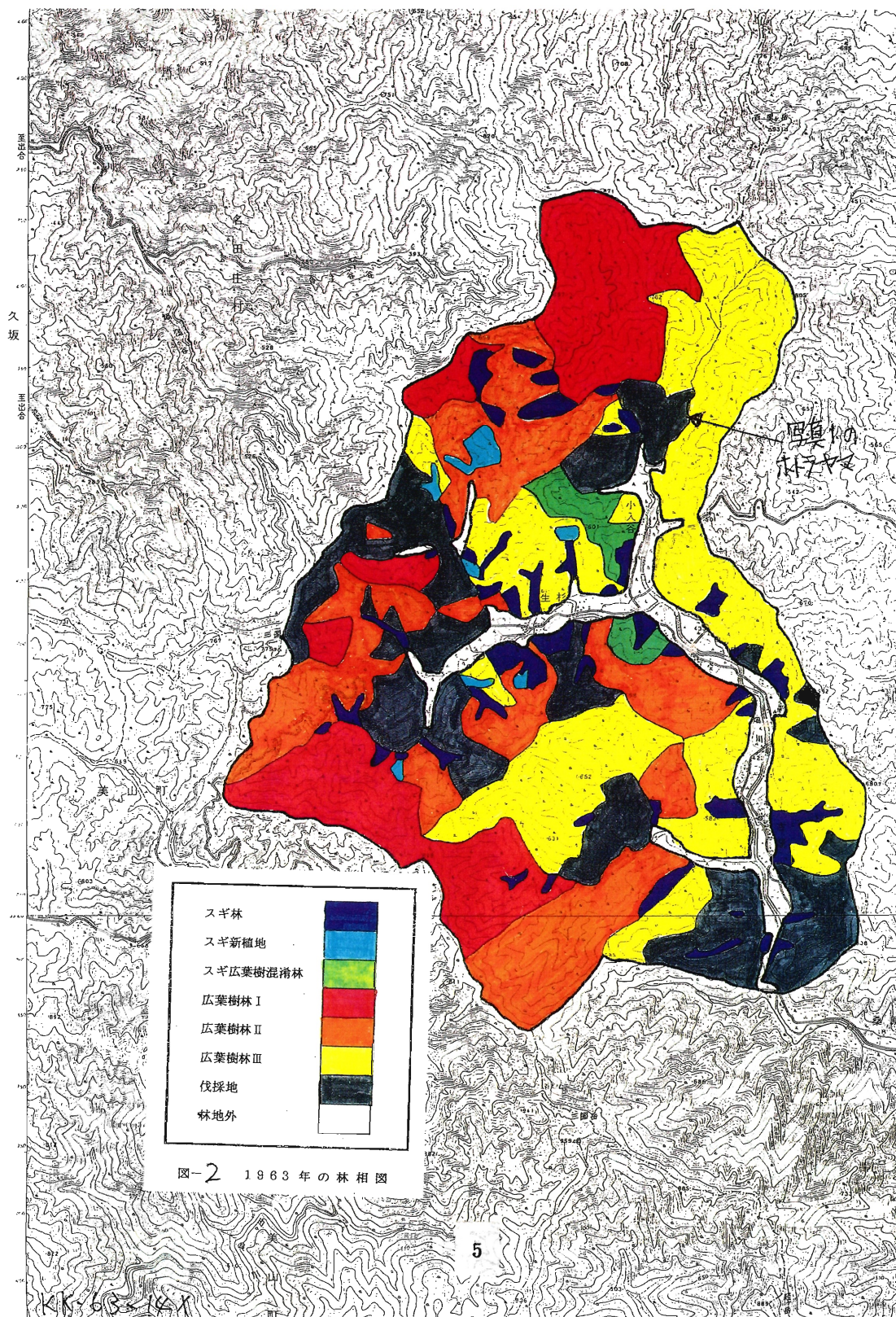


図-2 1963年の林相図

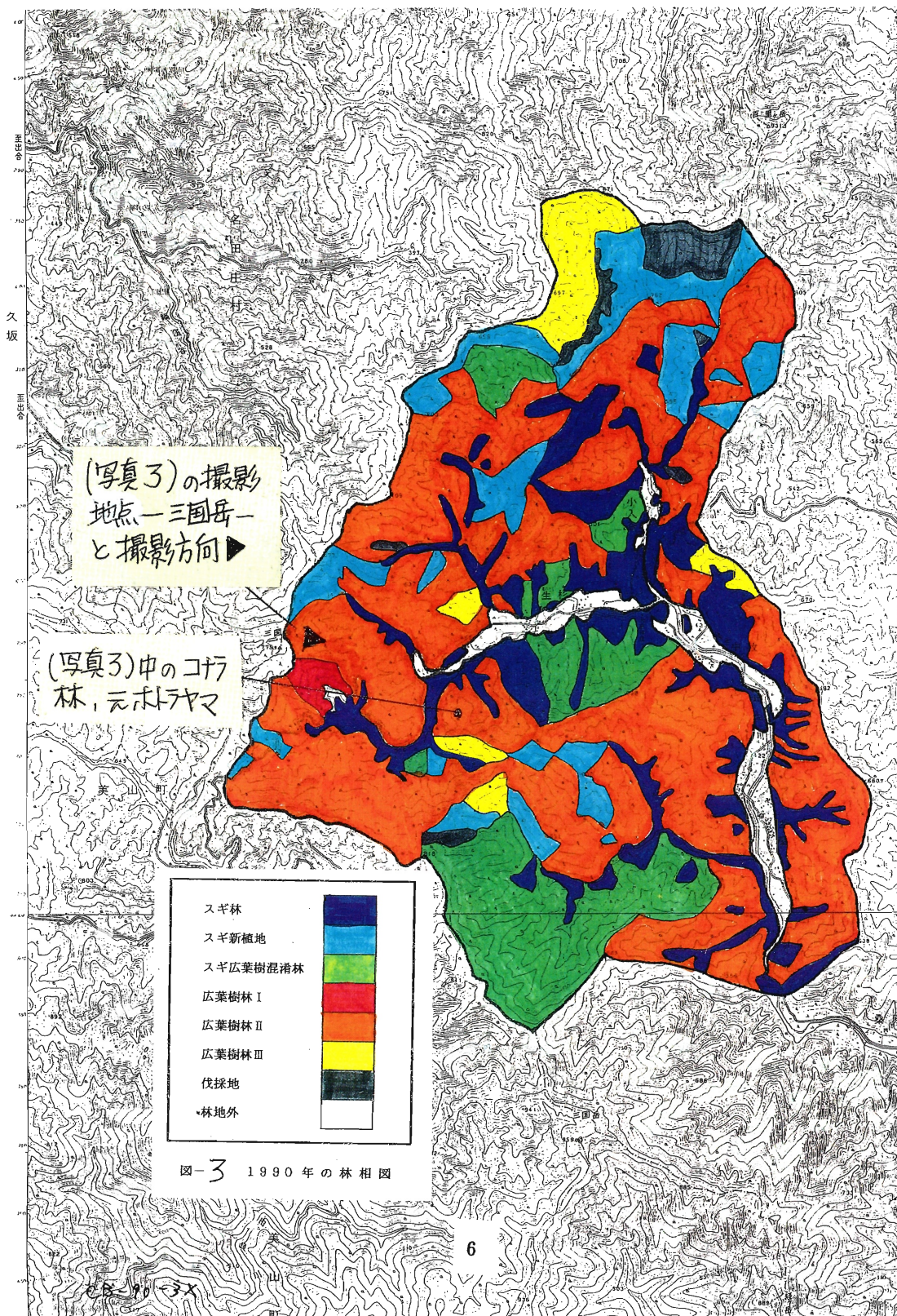


図-3 1990年の林相図

年輩者達からの聴き取りによれば、ホトラヤマ等のクサカリヤマ（草地）はおよそ1950年代ぐらいまで生きていた、という。ホトラ刈り等の火入れ慣行、草刈り慣行は、ある日突然消えたわけでは無論なく、実際には、不便な奥山の田んぼの耕作放棄から徐々に進んできた。田んぼの放棄はホトラヤマ等クサカリヤマの放棄にそのまま繋がった。

当時、耕運機が牛に代わり、化成肥料がホトラ肥にとって代わっていく中で、いわゆる、農業の近代化が山間部のムラにも押し寄せ始めた。1963年の空中写真からの林相図中、ねずみ色の「伐採地」は絶えず火入れしてきたホトラヤマ等のクサカリヤマもかなり含まれていると考えられる。また、黄色の「広葉樹林 3（若齢）」に関しては、戦後1950年代以降から始まった、チップ、パルプ材の伐出（大径木）現場を表しているが、その他の理由、例えばクサカリヤマ放棄後の若い二次林については未だ調査が不十分である。また、1990年林相図の「広葉樹林 2（壮齢林）」のうち、実際に30～40年生程度のナラ林がどのくらいの割合なのか、1－3の里山リサイクル案を考えていく上で興味ある事柄である。

②ホトラヤマなど里山の分布や広がりを探るための聴き取り調査

空中写真によって、巨視的に、針畑川上流域の山の相の変遷を見る一方で、そこに住んできた年輩者達が先代から受け継いできた一筆一筆の持山についてその種別を明らかにし、空中写真からの林相図の裏付けをとっていくのが、この項の狙いである。ここでいう山の種別とは、地元で呼び慣わしてきた次の4種である。

イ．ホトラヤマ・オシガイヤマ等のクサカリヤマ

注）オシガイヤマ；カリヤス（オシガイ）が優占するヤマ＝このカリヤスは、冬季に牛にやる干し草である。

ロ．薪や柴を作るタキモンヤマ

冬場の仕事にタキモン刈りやシバづくりをやった。

カタ雪の季節にソリ出しや一本びきで里まで出した。クサカリヤマより平均奥の方にあた。

ハ．主に稼ぎのために炭に焼いたヤマースミヤマ

30～40年生までが適当とされた。

ニ．芦生スギと呼ばれる天然スギの分布地帯でもあるが、天然更新による用材山として、手を入れてきたーテンネンヤマ 注）アテ、ヒノキ等も含まれる。

在所の中でも、山の移動（売買）が比較的少なかった農家を選んで聴き取りに応じてもらった。以下、林業施業図（縮尺5千分の1）を広げての聴き取りの有り様を紹介しておきたい。

（文中、1番、2番とは便宜上付した持山の整理番号である）

A－1番はタカギシですね。そこは戦後、杉を植えて、その前は荒れ山、雑木山。

2番がハゲタニ。これはヒノキの植林。尾根筋に。

B－尾根はヒノキ植えてあるし、下はほとんど天然やな。

（注 天然→テンネンヤマ＝テンネンスギの意）

谷口はまた、植林してあるけんど。

A－3番がセトガタニ、これはもう天然じゃ。雑木も混じっている。

炭にも焼いた。

A－4番がセトガタニのソラ（空）。薪とタキモノ

次がミズカミヤマ。上の方がブナで下のダイラが植林（スギ植林地）。

6番がオガヤ。ここはホソ（＝コナラ）になっていた。シイタケの原木に伐ったあと、今はササが入っている。

7番がクチノヒラガタニ。

B－ここは、天然のスギとゾウキ（雑木）と。昔はベベのベベヤマやった。

下の方はな。（注）ベベ＝イヌガヤの方言。実が灯明の油になる。

A－8番の方がですね。

A－9番がクラガタニグチ。

B－それは、もう造林公社にやって、（ケイヤクして）植林。昔は天然（スギ）

で、雑木も尾根のほうな、風がきついんか、短い短い…。この奥のマワリゼコには、ごっついのがあったわな。

B－10番がマワリゼコ 今は造林公社と分収契約。前は天然。ブナが多かったな。

ここで鉄道の枕木（クリ）も伐ってな。そして、生杉側のネゴリダシへ落としてな。

A－11番がクラガタニの南側。天然とブナと。12番がナメトコダニ。ここも天然

と雑木と。13番がキヨセバ。天然と雑木。14番がアゼモチ。天然と雑木。15

番がモントギバ。スソは植林して、上は天然と雑木。16番がノウ。下ではガヤを刈ったりして。ホトラなんかも刈った。クサカリヤマや。今はくりがよう生えてて。

で、次がフカセコ。これもクサカリヤマやったんですか。

Bークサカリヤマやったんやな。ここはわしや、長いこと窯、炭やったわな。

ここは、もう、き用の炭（自分の家で使っただけの炭）ばっかしやったさけな。
15年も20年もやっとな。

ほしたら下の木（初めに伐った山裾の木）はもう20年もすると、こんなぐらいになるから、また焼けるようになったけどな、もうそれせんとやめたけどな。
ここで……。クサカリヤマや。

ここは、もう、ごつついナジェ（雪崩）がくるときがあったんじゃ。

Aー18番がケソウダニでここは、クサカリヤマですね。

19番がミズナシダニ、これもクサカリヤマ。20番ハタガタニ。これもクサカリヤマ。いまは、雑木と松。21番がユル。

これもクサカリヤマ。オシガイも刈った。22番がクラマセ、ヨシダイラ。

23番がクリモトバラで、ヨシダイラ。

Bー今はもう、ヨシダイラ ないけんど。

（注）タキモンヤマとスミヤマは雑木という言葉で一括されることが多い。

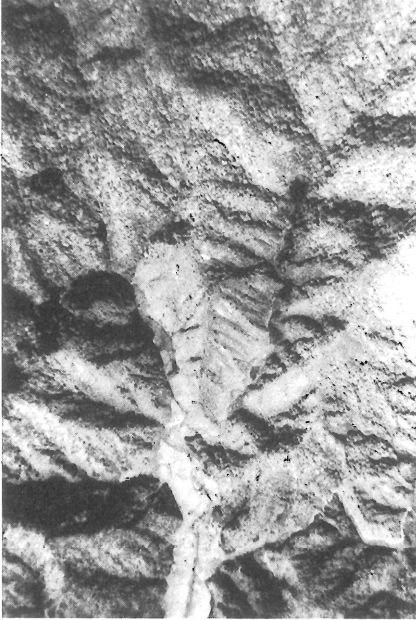
特に話し手Bは特に植林を積極的に進めてきた農家というわけではないので、かえって、一昔前の針畑谷の人達の山の付き合い方を知る上で手掛かりになると思われる。

4. おわりに

中間報告は里山履歴マップづくりの分野になったが、里山現況を調べるフィールドワークの成果を合わせて、針畑川流域の近未来の青写真＝里山を今日的に活かし直す仕事プランを次回最終報告書の中で提案したい。

写真1 密着写真によってホトラヤマの変化を観る

◆ 朽木村大字小入谷地先の戦後（1947～1990年）の空中写真（国土地理院）



▲ 1947年 ホトラヤマ慣行の生きていた時代
M628



▲ 1963年 ホトラヤマ慣行最後の時代
KK-63-14X



▲ 1979年 拡大造林地が出現
KK-79-1X



▲ 1990年 元ホトラヤマ広葉樹林Ⅱに
再生（約30年）
CB-90-3X

以上の聴取りの他に、元ホトラヤマや元スミヤマを6ヵ所現地踏査した。
 その山々に実際に通い、ホトラ刈りや炭焼きをやったムラの人に同行してもらった。
 30年前当時の山の姿や現在の二次林の現況について語ってもらった。
 (写真3 元ホトラヤマなどを歩く 参照)



▲ 写真2 三国峠（近江、丹波、若狭の境）775mより朽木村生杉の所在を遠望する
 右手前方の山ひだのうち山裾半分ほどの緑色の部分は元ホトラヤマで今はコナラが主の広葉樹林
 (Ⅱ)



▲ 元スミヤマの窯跡で
 写真3 元ホトラヤマなどを歩く



▲ 元ホトラヤマのコナラ林でアカマツの
 樹齢を調べる